

遺跡紹介

阿弥陀寺遺跡は、尾張平野の一角、海部郡甚目寺町大字石作の字「阿弥陀寺」地内を中心とする一帯に展開する弥生時代と中世との複合集落遺跡である。昭和56年度から名古屋環状2号線建設に伴う事前調査として継年で発掘調査を行っている。本年度の60A・B区において、従来県下であまり調査例を見ない室町時代の「屋敷地」が良好な状態で検出されたのでここに紹介したい。

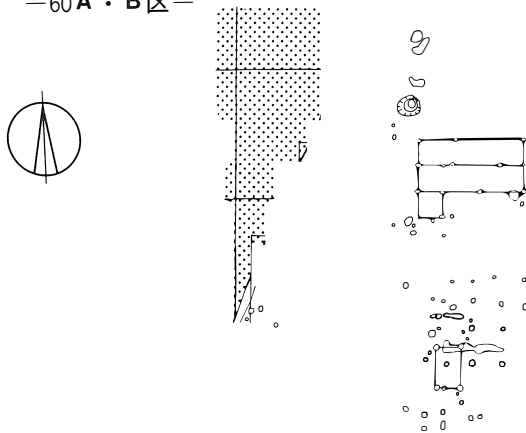
屋敷地は、東・南・西側を溝により画された東西約30m、南北約55mの方格のもので、その内に掘立柱建物8棟以上、井戸4基、柵列・

土壇等がみられる。屋敷地を画する溝は、西側のもものが小規模なのに比し、東・南側は堅固であり、南北・東西に二条の溝が各々平行に走っている。それぞれの溝間の高まりは「道」と考えられる。掘立柱建物は、いずれも棟軸を東西ないし南北にとり、そのほとんどの柱穴内には「礎板」が遺存していた。また、建物は、一部重複がみられ二回以上の建て替えが想定される。井戸は、大小二基ずつみられ、一部建物との重複がみられる。個々の遺構の時期区分については、なお検討を要すが、総じて14・15世紀代に比定される。以上、建物配置等の残された問題も多いが、尾張平野部における当該期の屋敷地の一様相について明らかにし得たものと考え。

(浅井 和宏)

阿弥陀寺遺跡遺構配置図

—60A・B区—



X=-88.490

0

20m

Y=-31.200

松ノ木（廻間）遺跡

……大規模集落遺構を検出中……

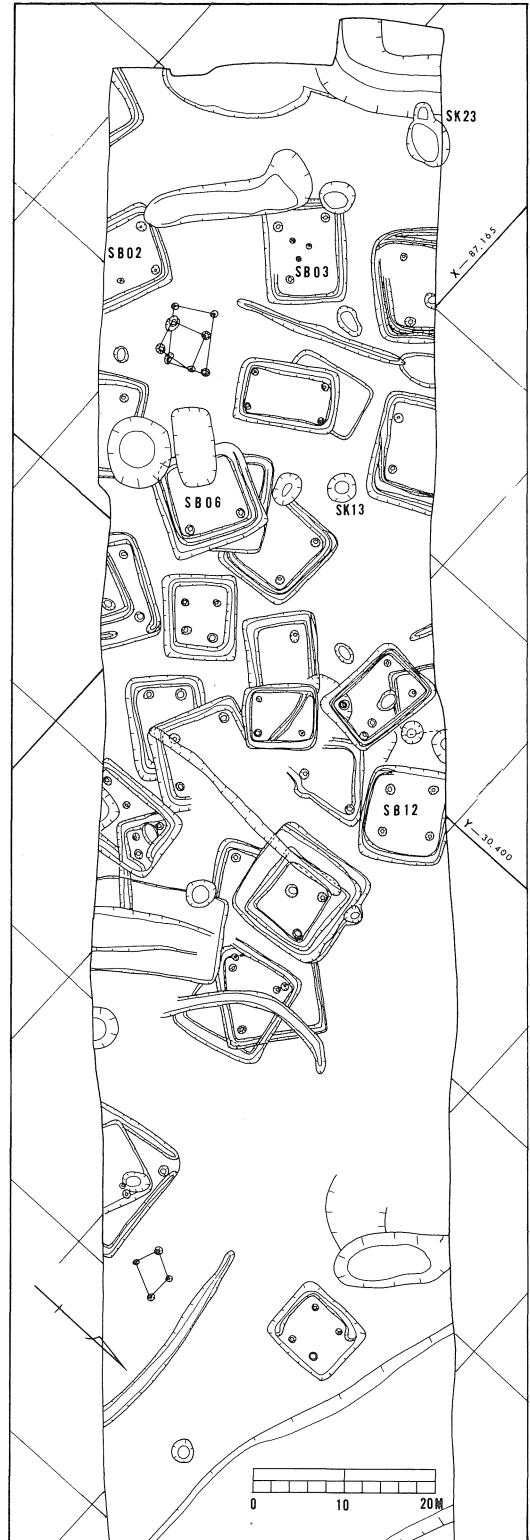
松ノ木遺跡は田中稔「愛知県西春日井郡清州町松ノ木遺跡」（『古代学研究』第14号 1956）で紹介されたのが最初である。昭和29年の夏、紡績工場建設に際して、土器が採取され、その分析の結果、弥生時代中期の遺跡として認識されるに至ったのである。

今回紹介するのは、この松ノ木遺跡の南端に属すると推定された地区の発掘調査についてである。発掘調査は昭和60年9月から当センターによって実施されていて、その調査結果に基づけば、本地区においては、田中氏の報告にあるような弥生時代中期の遺物は一切検出されず、弥生時代終末から古墳時代前期にかけて（いわゆる欠山式～元屋敷式）の遺構・遺物群を中心として、さらに奈良・平安時代から中世を通じて近世に至るまでの複合遺跡であることが判明した。また本地区は、先に前方後方形周溝墓を始めとする周溝墓群が発見された土田遺跡60A・B区の東側に接して位置し、同一の微高地上に展開しているのである。このように遺構・遺物の性格から言っても、遺跡立地の点から言っても、本地区を松ノ木遺跡の一角として理解することは不適當であり、土田遺跡60A・B区を含め、字名に基づく廻間遺跡として別呼称した方が適當であろう。

古墳時代前期の主な遺構としては、東北端より周溝墓群の一角及び隅丸方形四本柱の竪穴住居跡群と、同時期以前から少しずつ方向を変化させながら中世に至るまで流れていた旧河道の存在を確認した。竪穴住居跡は、長方形もしくは方形プランで、A・C区では34棟検出した。B・D区については現在調査中であるが、A・C区と同様又はそれ以上の住居跡が存在するものと思われ、標高 1.7m 前後の低湿地に展開した古墳時代前期の集落として他に類例を見ない大規模なものである。

また、遺物等については整理中のため詳細は不明であるが、4時期に大別できそうである。

（長島 広）



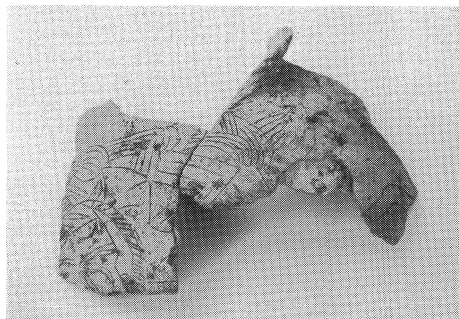
土田遺跡より出土

線刻文壺形土器

愛知県西春日井郡清洲町廻間地内に所在する土田・廻間遺跡の60B区から線刻文壺形土器が出土し、古代人の祭りを理解するうえで貴重な資料として注目されている。

この線刻文壺形土器は、古墳時代前期の方形周溝墓の北側溝から出土し、口径16cm、現存器高13.4cmを測る。体部外面には、丹が塗ってあったらしく、一部にその痕跡が認められる。

文様は、体部上半に篋状工具によって焼成前に刻まれており、人面かと思われる円形部と周縁部に大別でき、弧（半円形）と直線の複雑な組み合わせで構成されている。その意匠はきわめて抽象的であり、人間の思考を抽象化し描き出そうとした古代人の宗教的表現とも考えられる。また、出土状況から言えば、線刻文土器は



他の共伴土器とともに、祭りの専用の道具として作られ、使用され、廃棄されたものと思われる。その線刻表現を含め、当時の祭りの性格を理解するうえで何らかの手がかりとなるものであろう。それは、方形周溝墓への埋葬儀礼の一環として行われる首長権継承儀礼に伴う共飲共食に用いる重要な道具と考えることもできるのである。

(小澤 一弘)

センターニュース

調査録

朝日遺跡 (E・F・G区)

朝日式期の住居跡内から、多数の玉作り関係遺物が出土、玉作り跡と認定。弥生時代中期後半(貝田町式期)の方形周溝墓3基を確認。旧河道内から縄文式土器(後期前半)が出土。

松ノ木遺跡 (B・D区)

弥生時代末から古墳時代前期に至る竪穴住居跡群を検出。既に調査を終えたA・C区を合わせると60軒を越えるものと思われる。

土田遺跡 (B区)

古墳時代前期の方形周溝墓1基が検出され、周溝内から線刻文壺形土器が出土。

大淵遺跡 (A・H・F・K区)

弥生時代中期末(高蔵式期)の住居跡を約15軒検出、うち1軒は8m×8mの大型のもの。奈良時代の縦板組み隅柱止めの大型井戸を検出。

阿弥陀寺遺跡

幅2m余りの弥生時代の環濠の一部を検出。

来訪者

11/5・12 千葉県文化財センター 麻生正信氏 他2名

11/8 名瀬地区高等学校社会科教育研究会

11/12 堺市教育委員会 森村健一氏他1名

11/13 岩手県文化振興事業団 高橋与右衛門氏他1名

11/20 福井県埋蔵文化財センター 中司照世氏他5名

12/5 栃木県文化振興事業団 田代隆氏他2名

日誌

10/26 ~27 日本考古学協会の大会へ土田遺跡関係の資料をパネルで提出、紹介。

10/31 ~11/19 奈良国立文化財研究所主催の研修「予備調査課程」に池本正明主事が参加。

12/11 ~13 市町村埋蔵文化財担当職員研修会(基礎研修会)が行われた。参加者は19名であった。

埋蔵文化財愛知 No 3

発行 昭和61年1月
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター
〒450 名古屋市中村区名駅二丁目44番5号
名駅パークビル9F
TEL 052-586-3155
印刷 東海プリント社